立命館地理学　第10号（1998）83～88

高校・地理の授業改善の試み

――「地域調査」のポスターセッションを通して――

竹　部　嘉　一*

Ⅰ．はじめに

学校の教育現場において、地理教育を担当する教師は、大学時代に必ずしも地理学を専攻していないし、その大多数は地理教育の専門的なトレーニングを受けていないのが普通である（斎藤，1998）。社会科（当時）の教師に対するアンケートを実施したところ、「地理を担当したくない」とする教員が50％を占めていた（竹部，1994）。しかし、このような現状を嘆くだけでは、地理教育に何ら貢献するものではない。一方で、授業の指導方法の改善については、シミュレーション教材やディベートの導入など、さまざまな提案がされており、授業実践にも活用されている（山口，1993・寺本ほか、1997など）。

地理教育を改善していくためには、１つは地理を専門としない教師が容易に地理を担当できるようになることと、あと１つは地理を専門とする教師が積極的に授業のあり方を変えることが考えられる。もし、これらの努力がなされなければ、地理教育は地理教育の専門家の jargon の世界のみで語られるであろうし、授業はいつまでたっても講義形式のままであろう。

そこで、本稿では、教科指導上、教師の高度な専門性が必要とされる「地域調査」について、生徒の主体的な学習意欲を喚起するという点においてポスターセッションを導入した授業実践例を報告する。

Ⅱ．地域調査

「地域調査」は、巡検・オリエンテーリング・文献調査のいずれの形態で行うとしても、地理の専門外の教員には実施しづらいものである（齋藤，1995）。ところが、専門の教員による入念な準備が行われたにもかかわらず、生徒が今後も身近な地域を自分で調べてみたいという意欲を持つにまでは至らなかったという実践報告もある（伊藤ほか，1993）。

このように見ると、「地域調査」を実施する教師の側に、いささかの気負いを感じざるを得ない。むしろ、「ウロウロする楽しみ」を生徒に伝え、その中で「新たな、思わぬ発見」を感じることができるという地域調査（木下，1996）が理想的なのではなかろうか。あるいは、調査内容が「地理的」であるか否かの判断を生徒自身に委ね、その上で、生徒がどのような点に「地理」を感じているのかという生徒のセンスを知るような地域調査を実施することも意義があると考える。教師の方が失敗を恐れて、あるいは面倒がって何もし

* 大阪府立三国丘高等学校

なかったり、教師主導型になってフィールドにまで講義形式の授業を持ち込むことは避けたい。

Ⅲ. ポスターセッション

ポスターセッションとは、発表したい内容を文字・図・写真によってポスターにまとめて発表する方法のことである。発表する側は、自分の興味・関心に応じて調査してきた内容を、如何にポスターに表現し、如何に口頭で説明できるかという能力が問われることになる。一方、聞き手の側も、興味・関心のある発表をいつでも聞くことができ、気軽に質問することができる。このような点から、さまざまな情報伝達手段を用いることによって、生徒の自己表現力を高めることが可能となる（大阪府教育センター，1997)。

発表というと、発表者１名が多数の参加者の前で発表するという形式が思い浮かぶ。グループ研究であれば、発表者が複数であることもあろう。いずれにせよ、発表者は極度に緊張してしまい、聞き手の側からの質問も出にくい。高校生の場合、発表者が責任感や不安感などから緊張し過ぎてしまい、その後の学校生活に支障をきたす可能性も否定できない。けれども、ポスターセッションは、少人数に対して何度も発表を繰り返すので、緊張の度合いも軽減されるとともに、次第に発表内容も洗練されてくるようになる。発表のための創意・工夫が見られるようにもなり、発表者が、より達成感・充実感を味わうことができると考えられる。

Ⅳ. 授業実践

1. 準備段階

現任校では「地理Ｂ」と「日本史Ｂ」から選択した科目を、２年生と３年生で分割して履修させている。「地域調査」は、２年生で実施するように指導計画を立てた。1997年度のポスターセッションに参加した生徒は、２年生361名のうち地理選択者96名であった。

準備に際しては、まず、調査を夏休み中に実施できるように進度を調整した。ただし、学年当初の授業から、生徒に対して地域調査とポスターセッションの実施を予告しておき、あらかじめ調査したい内容やグループのメンバーの構成などを考えさせておいた。

１学期の学期末試験終了後の授業で、あらためて調査した内容をポスターにまとめるように告げ、ポスターの見本を数点示した。ポスターは模造紙１枚とし、見やすさにも配慮するように注意した。この時、調査の方法として、日常生活の中から「なぜ」という疑問を見つけ出し、その「なぜ」に答える仮説を設定し、仮説を証明するような形式をとることを求めた。また、仮説が正しいことが証明されなくても、「正しくない」ということを証明することも大切であると指摘した。さらに、一見、地理とは全く関係のない内容であっても、地理らしくなるように工夫することを求め、調査内容については一切干渉しないことを告げた。また、調査対象地域は、夏休み中に現地調査できる範囲とした。

調査の手段として、図書館だけでなく、行政や企業・協同組合などの広報機関での資料収集ができることを告げた。先方の都合も考慮させ、事前に連絡を取って目的を話してお

き、調査後は必要に応じてお礼状を差し出すようにさせた。なお、生徒の調査内容については、生徒から相談を受けた場合を除いて、特別な指導はしなかった。しかし、実際に調

第1表　地域調査のテーマ・内容・と生徒の評価得点

No	テーマ 内容	自己評価得点	相互評価得点
1	堺東交通量調べ 堺市役所前交差点の自動車の交通量を調べた。	3.7	3.0
2	僕と道路と標識と… 大仙古墳周辺の道路交通標識を調べた。	3.5	3.2
3	てくてくろーど 堺市内の観光スポットを紹介した。	4.4	4.4
4	THE☆コンビニ 泉大津市と泉北ニュータウンのコンビンニエンスストアの立地密度の違いの理由を考察した。	4.8	4.5
5	和泉警察署事件簿 和泉警察所管内の交通事故多発地点を調べた。	5.0	4.4
6	さかいの商業～商業はどんな所に栄えるのか？ 堺市の都市規模と小売店数の動向を他都市と比較し、堺市の商業の将来予測を含めた考察をした。	4.9	4.1
7	めぐりめぐる堺～伝統工芸編～ 堺市の地場産業の発展過程を調べた。	4.0	3.8
8	柱状節理ってどーなってるの？ 福井県東尋坊の柱状節理の形成を調べた。	4.2	4.4
9	ぼくらの大仙～そして打ち上げへ～ 大規模緑地の大仙公園の施設を調べた。	4.4	4.3
10	１２３しんごう 信号のサイクルから、交通量の違いを考察した。	4.3	4.0
11	WHERE IS 堺東？ 「堺東」を名乗る公共施設の位置と建設時期をもとに、堺市の市域の拡大を考察した。	4.7	4.3
12	こんびに 学校周辺にあるコンビニエンスストアの立地を調べた。	4.3	3.5
13	タイム・スリップ～昭和のベルサイユ宮殿～ 三国丘高校の旧本館を紹介した。	5.0	4.4

※自己評価表は89人分、相互評価表は274人分を回収した。

査が始まると、逆に教師の干渉を嫌う傾向が出始め、相談を受けたり、生徒の調査活動を直接観察することはできなかった。

2. 発表当日（第１図～第４図）

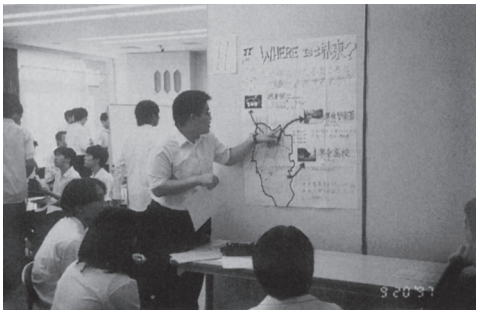
発表は、学校行事などの都合により、９月の第３土曜日の午後に実施した[1]。当日の発表内容は、全く無目的に調査をしたと思われるものから、仮説をたてて検証しようとしたもの、身近かな地域の事象から海外にまで目を向けているものなど、いろいろであった（第１表）。ポスターからは、生徒が市役所・警察署・伝統工芸品の生産組合などを訪ね、資料を収集していることを伺い知ることができた。また、ポスターには地図や写真などが多用されており、ポスターを見る側への配慮が見られた。

あらかじめ発表者の時間分担を決めさせていたので、空いている生徒から他のグループの発表を聞いて回っていた。担任・他教科の教師の参加もあり、生徒の説明も白熱した。最初は戸惑っていた生徒も、慣れてくると友人を引っ張ってきて説明を聞かせるという光景も見られた。

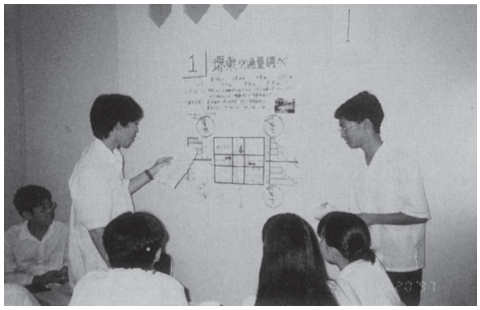
3. 生徒による「評価」

地域調査を実施した場合、その結果をレポートや調査ノートにまとめさせ、それを教師が評価することが多い。ここでは、「自己評価」と「相互評価」に分け、評価そのもの

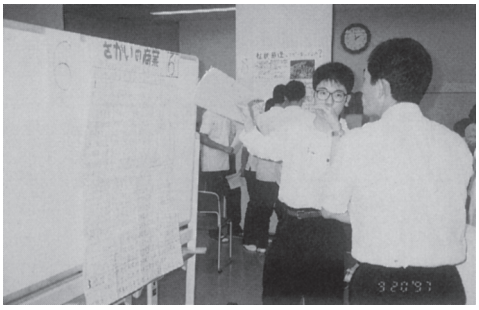
第１図　発表当日の様子（１）
開始間もなくで、生徒の表情も緊張している。



第３図　発表当日の様子（３）
慣れてくると、原稿から目を離して発表するようになった。



第２図　発表当日の様子（２）
説明用の原稿を片手に、発表をしている。



第４図　発表当日の様子（４）
先生からの質問に対して、一生懸命に答えている。

もすべて生徒に委ねた。これは、生徒全員が調査を実施しており、自分自身のグループ調査への態度や、ポスター・発表内容の完成度をもとにして、自分のグループや他のグループの調査内容を客観的に評価できるであろうと期待したからである。評価表は、展示資料の内容や説明者による説明など、それぞれ8項目の質問に対して1～5点の点数で評価できるようにして作成した[2]。評価表は発表当日に配布し、その場で回収した。

自己評価表には、生徒の感想も書かせるようにした。「自分の住んでいる町のことなのに、知らないことがたくさんあった」というような地域調査に関する感想や、「工夫して書いた地図で説明したら、みんなわかってくれたので嬉しかった」というようなポスターの表現に関する感想、あるいは「自分の調べてきたことを、人にわかってもらうように伝えることがむずかしい」というような発表方法に関する感想など、その内容は多岐にわたった。また、「日本史選択の友だちにも見せたかった」とか、「調査に不熱心であったために、とても後悔している」という内容の感想も見受けられた。

V. おわりに

「地理B」教科書の教師用指導書の「地域調査」の項目を見ると、いくつかの調査例が示されている。ところが、そこに示されている事例には、あまりにも詳細で理想的すぎるものもある。あるいは、逆に概略的すぎて生徒を指導するに耐えられないというものも見受けられる。また、調査方法の記述は詳しくても、調査結果の取り扱い方や評価方法まではほとんど示されていない。このような教師用指導書は、地理を専門としない教師が気軽に使用でき、かつ容易に地理の授業ができるような内容とはいえない。指導書の改善は、教科書会社のレベルだけではなく、地理学界や地理教育界全体で作成する体制が必要であろう[3]。

今回の生徒の「地域調査」の中には、仮説の設定が曖昧になり過ぎ、教師の意図から大きくかけ離れたものもあった。ところが、そのような調査であっても、発表時の生徒の「ウケ」がよかったために、高い相互評価得点を得たものがあった。今後の課題として、評価のあり方の解決に取り組まなければならない。本稿で示した事例は決して完璧なものではないものの、地域調査を積極的に導入するきっかけにはなろう。

地理に限らず、従来型の授業では、生徒は教室の中で教師から一方的に「知識」を伝授されるという形態が主流であった。ここでは、より多くの「知識」を備えた生徒が「優秀な生徒」と評価され、自らが「考える」という過程にはほとんど留意されなかった。ところが、世の中の事象はあらかじめ答えが用意されているとは限らず、むしろ困難な課題を解決に対応できる能力が求められている。本稿で示したポスターセッションの授業実践に対して、「これが地理教育でするべき内容か」という疑念も、当然生じるであろう。しかし、この授業実践によって、生徒は資料収集の段階での対人関係の構築、収集した資料の整理・考察・まとめ、さらには口頭発表という研究の手順を、地理を手段として学んだともいえよう。地理に情報発信型授業を導入させたことで、「地理が好きだ」という生徒が増える

という効果も期待できる[4]。

〔付記〕本稿は、1997年度立命館地理学会大会で発表した内容の一部である。授業実践にあたっては、奈良教育大学の岩本廣美先生から貴重な資料を御提供と御助言をいただいた。また、大阪府立芥川高校の稲田克二先生には、有益な御助言をいただいた。あわせて厚くお礼申し上げます。

末筆ながら、「『地理が好きだ』という生徒を増やしましょう」と御教示いただきつつ、1998年3月に立命館大学を定年退官された鈴木富志郎先生に、この拙文を献呈させていただきます。

注

1) クラブの公式戦などによる当日の欠席者は6名であった。
2) 相互評価表と自己評価表は省略した。
3) この点については、アメリカ合衆国のARGAS（Activeties and Readings in the Geography of United States）が参考になる。
4) この授業終了後、1年生（当時）に対する2年生次の選択科目希望調査が行なわれた。宣伝効果もあったせいか、1年生全体361名のうち、151名が地理Bを選択した。

参考文献

寺本　潔・井田仁康・田部俊充・戸井田克己『地理の教え方』、1997、古今書院。
山口幸男編『シミュレーション教材の開発と実践—地理学習の新しい試み—』、1993、古今書院。
伊藤　尚・武藤憲一・白山雅彦・中村　薫・佐々木英憲「身近な地域の教材化—高校地理による野外調査—」、秋田湾地域の研究8（秋田地誌研究会）、1993、59～86頁。
大阪府教育センター『授業を変える—新しい学力観に基づく高等学校教科指導事例集—』、1997、50頁。
木下禮子「地域調査への取りくみ」、地域研究・テーマ研究をどう取り組むか（神奈川県高等学校社会科部会地理分科会）、1996、16～17頁。
齋藤清嗣「高等学校地理A・Bにおける野外調査の指導方法に関する考察」、1995年度人文地理学会大会研究発表要旨、1995、154～155頁。
斎藤　毅「地理教育の刷新と活性化に関する方法論的考察」、地理学評論71A、1998、84～89頁。
竹部嘉一「生涯学習に位置づけられた地理教育」、立命館地理学6、1994、55～60頁。